比叡山時報

発行所
比叡山時報社
☑jihoh@deluxe.ocn.ne.jp
大津市坂本本町4220
郵便番号　520―0116
電話　077―578―0001
振替　00970―2―9732
宗教法人延暦寺事務所
定価　1部110円　年1200円

延暦寺広報

叡山講福聚教会
会　報
年度会費（3000円）中に会報（比叡山時報）購読料を含む。

平成30年比叡山の言葉

敬和憶

和して敬うを憶う

ご購読はこちらから

延暦寺御用達
森忠法衣店
森忠兵衛
京都市中京区押小路烏丸東入ル
電話　〇七五-二三一-一二〇三番

根本中堂内護摩壇に奉安される月光菩薩像（手前）と薬師如来像

冬の到来に想う

日の暮れの早さとともに、朝夕の冷え込みに冬の到来を実感する季節、十一月。比叡山ではみぞれ混じりの雪が降ることもあり、霜月と呼ばれたのも納得する。虫の音もどこか遠くに、その分空気がいよいよ冴えわたり、夜長の空に輝くお月さまが誠に美しい。

実は月と仏教は昔から密接な関係があり、例えば「満月仏」や「月光菩薩」など仏さまのお名前にまでなっている。恐らく闇夜を照らす月は、迷いと苦しみの世界に生きる私たちの行く先を照らし導く存在として大切にされたのかもしれない。

一方、月は満ち欠けをする特徴を持つ。十五夜のような欠けたることのない満月は、仏の悟りの境地、こころの状態として「満月の如し」と譬えられるほどに美しい。しかしながら常に満月には見えない。月そのものは変化していない筈だが、欠けていく様子が目に映る。その完全ではない姿もどこか私たち人間に通じる様であり、それだからこそ尚一層、理想の姿を追い求める人の心に身近な存在としてあるのかもしれない。

鎌倉時代の僧兼好法師は『徒然草』に、「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。云々」と言って、「花は満開のときだけを、月は満月で雲りがないものだけを見るのであろうか、いやそうではない」と主張する。雨の日にはその雨空の上に輝く月を想像して、雨を楽しむのも一興であるというのである。

我々は、いま目の当たりにする物事の部分だけを見て、ああでもないこうでもないと一喜一憂してしまうことが多い。実際にはあのお月さまのように見事な満月を備えているのに、その満ち欠けだけを追ってしまっているのかもしれない。変化する物事の奥側は全ては仏さまの思し召しであると、満月のように満ち足りたものであると信じるなら、満ち欠けする目の前の状況を少しは興（おこ）しめるのかもしれない。

この季節、穏やかに照らす月を愛でながら、人生の夜長を想うのも一興でないだろうか。

教宗派の違い乗り越え共に法要厳修

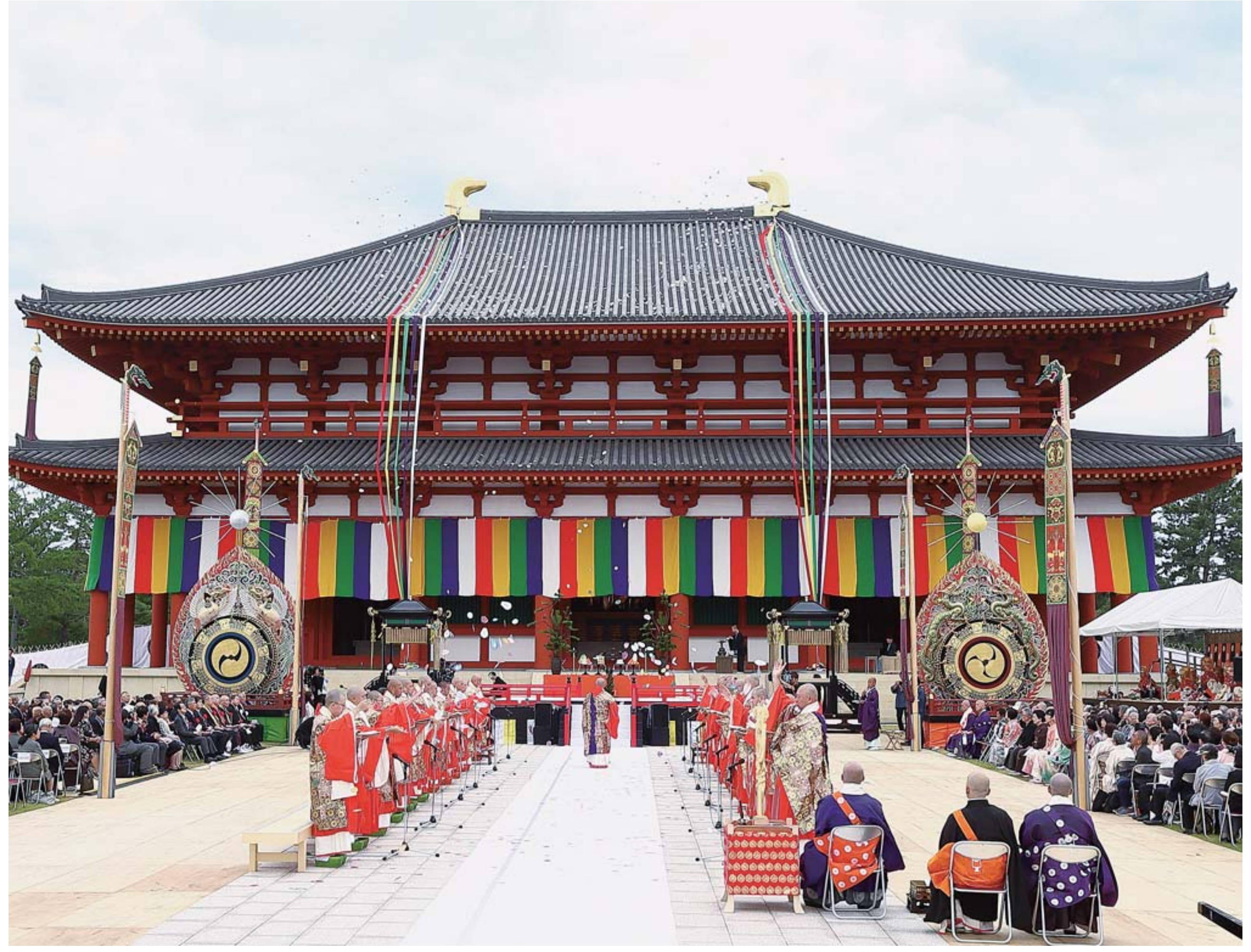
興福寺中金堂

天台座主を大導師に四箇法要執行

散華舞い、梵唄響く古都

法相宗大本山興福寺（奈良市・多川俊映貫首）の中金堂が10月7日、天平時代の規模や様式を再現して３０１年振りに再建された。中金堂の規模は高さ21㍍、東西37㍍、南北23㍍で、直径77㌢、高さ10㍍のケヤキの柱が36本使用されている。

落慶法要は11日まで営まれ、８日の西国三十三札所会、９日の南都隣山会に続き、10日午前10時には比叡山延暦寺が、森川宏映天台座主猊下を大導師に、一大勝縁を慶讃する法要を執り行った。



法要開始と同時に曇天の会場の空には次第に日の光が差し込み始め、出仕僧侶が散華を投じた瞬間、中金堂の大屋根からも大量の散華が放たれ、日に照らされた花びらがキラキラと宙を舞った

座主猊下が表白を読まれる歴史的瞬間

声明法要で落慶を慶祝

法要は森川宏映天台座主猊下大導師のもと、延暦寺一山住職始め、京都等近隣教区から25名が出仕し、庭儀四箇法要をもって中金堂の落慶慶讃に最高の礼が尽くされた。

中金堂前に特設された会場に参列者が着席を終えた9時45分、出仕僧侶は雅楽の演奏を先頭に３００mほど離れた興福寺本坊を行道にて出発。続いて座主猊下が南都の様式が色濃く残された轅（えん）と呼ばれる輿にて会場へと入場された。

午前10時、会場を埋め尽くした参列者の前では舞楽に続き、大和未生流家元須山法香斎氏による献華・武者小路千家家元後嗣千宗屋氏による献茶が執り行われ、その後威儀を正した出仕僧侶による声明が始まりを迎えた。

声明は「散華」「対揚」「梵音」「錫杖」と続き、荘厳なる天台声明の旋律が秋晴れの興福寺境内に響き渡ると、参列者は時間を忘れ聴き入った。

座主猊下は表白のなかで、「一千三百有余年、普く日域を照らしたその威風も享保の大火、また明治維新の災難など七難を逃れるを得ず、しかし多川貫首の中金堂再建の発願において本日再建落慶の喜日を迎えられることとなった」と慶ばれ、その上で「諸尊加持護念を垂れて願主が心願を成就せしたまえ」とお言葉を結ばれて、興福寺の一層の繁栄と仏法の興隆を祈られた。

法要後多川貫首は、「約６２０年振りの天台座主猊下のご出仕に感謝している。繊細で美しい声明も聞けてうれしい」と喜びを語り、座主猊下も「生涯忘れられない法要となった」と述べられた。

轅に乗り会場へと向かわれる座主猊下

「南都」と「北嶺」の関係

興福寺は藤原氏の始祖藤原鎌足（６１４〜６６９）が、山背国山階（現・京都府京都市山科区）に創建した山階寺（やましなでら）を起源とし、和銅３年（７１０）の平城京遷都の際、鎌足の子である不比等により現在地に移転され「興福寺」と名付けられたもの。この度再建された中金堂はその最初の堂宇として建立された。

藤原氏の氏寺興福寺の中核をなす中金堂は当時奈良随一の規模を誇ったが、６回の焼失と再建を繰り返した後、享保２年（１７１７）の大火以降は「仮堂」が再建されただけだった。

興福寺の代名詞とも言える「南都」の対義語として比叡山を「北嶺」と称すなど、歴史上延暦寺と興福寺の勢力争いは有名で、平安時代末期に成立した説話集『今昔物語集』では、祇園祭で有名な八坂神社の前身「感神院祇園社」は、元来興福寺の僧侶によって建立されたものだが、延暦寺の末寺院と紅葉の枝をきっかけに両者の間で紛争が起こり、結果祇園社は延暦寺の末寺となった等、延暦寺と興福寺の対立がいくつか記されている。しかし興福寺の文献には過去何度か延暦寺と交流があった例も残っており、今般の法要執行にて両寺の関係はより密接なものとなった。

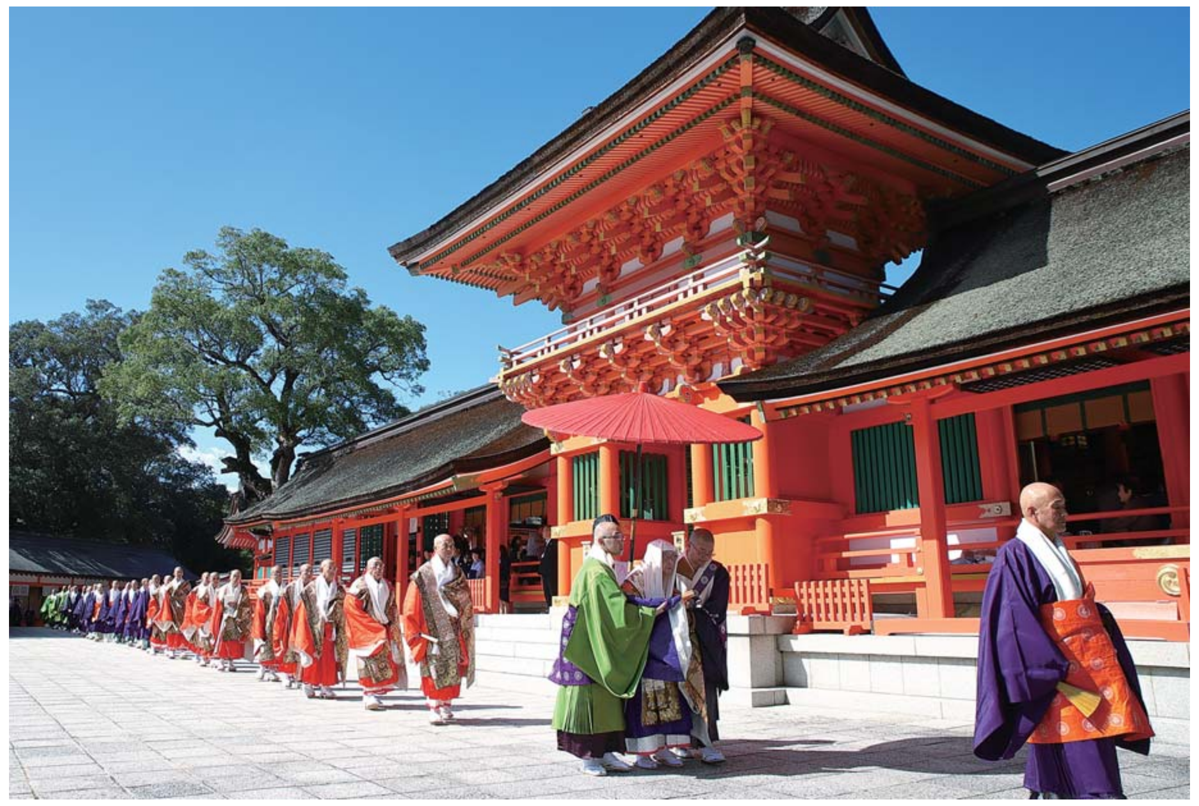
錫杖師による声明の独唱

宇佐神宮

神域で御親修法華八講執行

神仏習合発祥の地で仏教法要

日本人の信仰の源流に回帰



照りつける日差しのなか、朱色の映える宇佐神宮南中楼門前を行道する座主猊下と出仕僧侶ら一行

全国八幡社の総本宮、また、神仏習合発祥の地として知られる八幡総本宮宇佐神宮（大分県宇佐市・小野崇之宮司）において、10月20日、八幡大神（八幡大菩薩）の御前で『法華経』の教えを問答し報恩の誠を捧げる法要「御親修法華八講」が奉修された。

法要は本年六郷満山開山１３００年を迎えた九州東教区主催のもと、秋吉文隆宗務所長が総奉行を務め、森川宏映天台座主猊下を証誠師にお迎えし営まれた。

十年一会の法要始まる

法要を目前にした正午12時30分、九州東教区の出仕僧侶や随喜の僧侶ら約50名は、参集場所となる宇佐神宮勅使齊館を出発。秋晴れの高く突き抜ける青空のもと玉砂利を踏みしめ祓所まで進み、神職によるお祓いを受けた。その後小高い丘陵である小椋山（亀山）にある上宮申殿まで約25ｍの標高差の石段を引き締まった空気のなか行道した。

上宮へとつながる朱色の鮮やかな西大門では、森川座主猊下と小野宮司が出仕僧を出迎え、神職と僧侶が共に南中楼門前を行道し、午後１時申殿へと着座して十年一会の法要が始まりを迎えた。

神職による祝詞奏上に続き座主猊下が神前で表白を読み上げられ、その中では、「伝教大師の入唐求法は八幡神のご加護によって成就され、天台宗の礎が築かれた」と謝意が述べられた。

法要は「法華八講三問一答」を以って修され、壱之問を國光豪晛願成寺法嗣、弐之問を寺田豪淳両子寺副住職、参之問を永井義寛萬福寺副住職の３名が問者として『法華経』の教義を問い、講師を勤めた野中玄雄善正寺住職がそれらの問いに答えた。参列した檀信徒らは廻廊に坐して問答の様子を見守った。

法要の終盤では出仕僧侶により「南無八幡大菩薩」と八幡神を讃える宝号が唱えられ、その後座主猊下により神前に玉串が献ぜられた。

神前にて表白を読まれる座主猊下

申殿での法華八講奉修の様子

式典と特別授戒会も執行

法要に先立って午前10時30分からは宇佐神宮参集殿において、約３００名が参列するなか開会行事が執り行われた。秋吉宗務所長は「平成最後の御勝縁に御親修法華八講を厳修できますこと喜びにたえません」と関係者に深甚の謝意を表し、これから法要へと望まれる座主猊下は、「３年後に大遠忌を迎えられる宗祖伝教大師さま所縁の宇佐神宮で法要を勤め、お大師さまに篤い思いを寄せたい。この法要で出仕の僧侶、また随喜される方々も必ずや八幡大神のご加護と仏の大きな功徳を授かるはず」と意気込みを語られた。

また教区では、法要終了後の翌日、今般法要と併せ、天台座主御名代叡南覺範探題大僧正が伝戒和上を勤められ、特別授戒会が執行された。

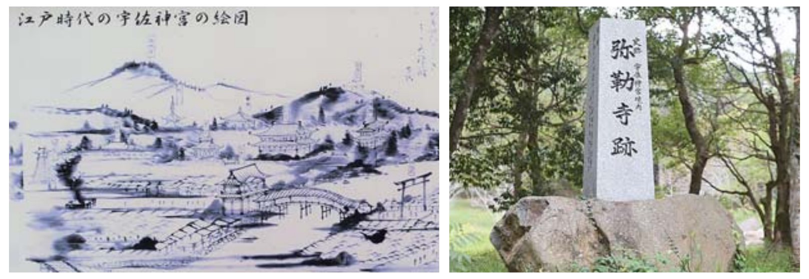
境内に建つ安南豊前宝塔院顕彰碑と歴代座主の御親修記念碑

延暦寺と宇佐神宮

宗祖伝教大師は入唐求法の際、八幡神に渡航の安全を祈り、帰国後の弘仁５年（８１４）宇佐神宮にお礼参りされた。『叡山大師伝』によると神前で『法華経』を講じたことに大神は大喜びし、ご宣託を下して紫袈裟と紫衣を手ずから大師に授けられ、大師はこの地に日本の国を護る六所宝塔の一つとして法華経壱千部を納める多宝塔の建立を発願された。のちにそれは「豊前国宇佐弥勒寺」に「安南宝塔」として実現されることになる。

明治政府の神仏分離令（１８６８）の影響で、神と仏が分けられ、神宮寺として往時に絢爛豪華な伽藍を有した弥勒寺は礎石を残すのみとなったが、延暦寺では大正７年（１９１８）第二四四世天台座主不二門智光猊下により「御親修法華八講」が奉修され、昭和53年（１９７８）には第二五三世天台座主山田恵諦猊下の御親修で50年振りに復興された。以来法要は10年ごとに営まれ、今回で５回目を迎えることとなった。

福聚教会会員の御詠歌が境内に響き法要に彩りを添えた


江戸時代の宇佐神宮の絵図
弥勒寺跡

江戸時代に描かれた宇佐神宮と弥勒寺跡を示す石碑

比叡山延暦寺大霊園

比叡山延暦寺大霊園　管理事務所
〒520-0362 滋賀県大津市伊香立上龍華町703
TEL 077−598−2481　FAX 077−598−2753
霊園ホームページ http://enryakuji-daireien.jp

精進料理と
眺望清逸の宿

千二百年の時空を越え
大いなる自然と、
自らの心に向き合う。
街の喧噪から
わずか三十分の
聖域のなか…。

［宿坊］国際観光旅館 比叡山延暦寺会館
〒520-0116 滋賀県大津市坂本本町4220番地
TEL.077-578-0047　FAX.077-579-5053
「ご予約の際は専用電話番号 077-579-4180 におかけ下さい」
［延暦寺会館ホームページ］http://syukubo.jp